

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：32692

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330183

研究課題名(和文) 精神医療現場における多相的コミュニケーションの共創支援～開かれた関係構築に向けて

研究課題名(英文) Co-creation support of Polymorphic Communication in the field of mental health: Toward constructing a newly "open" relationship among all concerned

研究代表者

榎本 美香 (Enomoto, Mika)

東京工科大学・メディア学部・講師

研究者番号：10454141

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,500,000円、(間接経費) 3,450,000円

研究成果の概要(和文)：高次脳機能障害や精神障害などの障害名が与えられた人々(the Communication Challenged; 以下CC)と精神医療現場の人々(医師、看護師、作業療法士、家族など)が相互の やりとり を多相化することを通じて、参加者全員が共に障害や困難に向き合える開かれた関係性を再構築することを試みた。多相的コミュニケーションの実践として、(1)リエゾンカンファレンスや近隣施設同士のケーススタディなど様々な立場の者で同じ事例を検討する多声化(2)着物セラピーや就労模擬面接を通じた多様な役割取得を行う多重化を行い、新たな交流の場と役割取得の場を構築した。

研究成果の概要(英文)：We developed the concept of Polymorphic Communication Intervention (PCI) in order to construct a newly "open" relationship between the Communication Challenged (CC), with higher brain dysfunction or psychiatric disorder, and all the other participants in the field of mental health, including psychiatrists, nurses, occupational therapists, and CC's families, which enables them to share the communicative disabilities of CC as a collective matter. PCI consists of the following strategies: (a) establishing communicative polyphony, (b) multiplying social roles. For the purpose of composing the communicative polyphony, we have designed each setting of liaison conference in a rehabilitation hospital and of case discussion among welfare facilities to effectively share different perspectives of medical or welfare experts. We also have multiplied social roles in CC themselves through the Kimono therapy and mock job interviews, designed to give chances for them to play different roles.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：多相的コミュニケーション 精神医療 実践 コミュニケーション 会話 関係性 多職種

1. 研究開始当初の背景

従来の精神医学では、精神障害や高次脳機能障害などの障害名が与えられた人々(the Communication Challenged; 以下CC)の抱える障害や困難をCC個人の疾患として捉え、精神病院やリハビリ施設等の中でその疾患を治療・緩和しようとする一元的アプローチが主流であった。しかし、社会学者ゴフマンが指摘するように、精神病院が一つの価値や意味によって全面的に覆われている全制的施設になる危険性が意識され始め、最近では日本でも精神病院を中心とした精神医療から地域ネットワークに根ざした地域精神医療へと変革を遂げつつあるが、未だにその具体的な指針は模索状態にあると言える。

一方、精神保健分野の先導国イタリアは、「脱施設化」というスローガンのもと、1978年の法律180号(通称「バザーリア法」)により精神病院への新規入院を禁止し、病院から地域へと医療の場の転換を推し進めてきた。2000年には全土の公立精神病院閉鎖を達成し、現在では総合病院内の精神科病棟を残すのみとなっている。ここで注目すべきことは、この精神保健改革が単に「精神病院の閉鎖」という施策ではなく、治療・管理される対象としてのみCCを捉えるという「画一的価値観の解体」というパラダイム転換であったという点である。精神科医バザーリアの問いは「精神疾患の治療をどこですか」ではなく、「苦悩を抱えて生きるCCの人生にどう関わりどうサポートするか」であった。

こうした背景から、本研究も、CCが抱える問題を単にCC個人「内」の疾患と捉えるのではなく、周囲の人々との「間」にある関係性の問題として捉え直すという視座に立つ。CCと精神医療現場の人々が無自覚に行っている硬直したコミュニケーションを開き、彼らが治療者 被治療者 介護者 被介護者 といった限定された関係性を超えて、多様かつ根源的な生を「共に」生きることを可能にするコミュニケーション環境を構築することを研究の最終目標とする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、CCと精神医療現場の人々(医師、看護師、作業療法士、家族など)が相互の やりとり を多相化することを通じて、参与者全員が共に障害や困難に向きあえる開かれた関係性を再構築することにある。具体的には以下のアプローチに基づき多相的コミュニケーション介入(Polymorphic Communication Intervention; 以下 PCI)の実践を行う。

(1) 多声化: 既存の やりとり の場を、様々な立場にある者が柔軟に出入りできる場に変

える。このことにより、単一の「声」(e.g. 医療の声) が支配的となっていた場に様々な立場からの「声」を響かせることを可能にする。

(2) 多重化: CCが様々な役割で参加する新たな やりとり の場を創設する。CCにこれまで付与されていた固定化された役割を相対化させるために、他の様々な役割(e.g. 面接官、講師、ゲストなど)で参加する新たな やりとり の場を創設し、そうした複数の場で生じる多重の役割遂行を通して、他者との多様な かかわり を獲得する機会を与える。

(3) メタ認知化: 現在のコミュニケーション環境における やりとり を録音・録画・日誌などを通して記録し、それを視聴することを通して、自他の振る舞いやそこで生じている関係性をメタ的にモニターする視座を与える。

こうしたコミュニケーションの多相化によって生じる参与者の関係性の変容がCCの抱える苦悩の治癒にとってどのような正負の効果があるかを検討し、研究期間終了時には、地域ネットワークに根ざした地域精神医療への具体的な指針として実用的なPCIプログラムを公開する。

3. 研究の方法

本研究の方法は以下である。

(1) 多相的コミュニケーション介入 (PCI) の実践と関係性評価

多相的コミュニケーション介入 (PCI) の実践とデータ収集 (H23~25年度)
関東圏7施設において、PCI実践とデータ収集を行う。PCI実践とは病院内デイケア室やグループホームなどで、多声化、多重化、メタ認知化を可能にする新たな場を創設することであり、のちの分析のためにこの試みを随時収録する。

心理評価尺度やカウンセリング技法を用いた関係性評価 (H23~25年度)
PCI実践により生じるCCと他者との関係性を箱庭療法、風景構成法などを用いて、参与者が他者との関わりをどの程度感じているかを評価する。

(2) PCI分析とPCIプログラム立案

相互行為分析/心理統計分析によりPCIに有効なコミュニケーション変数選択 (H24~25年度)

会話の局所で生じている相互行為のミクロな様相を相互行為分析を通じ以下のようなコミュニケーション変数を抽出し、(1) で評価する関係性に大きく寄与する変数を個人差を

配慮した一般化線形モデルなどの心理統計分析により選択する。

認知語用論分析によりPCI前後のコミュニケーションモデルを構築 (H24~25年度)

(2)- によって選択されたコミュニケーション変数が関係性変容に対しなぜ有効なのかを検証するために、多相的コミュニケーションを通じて主体内、主体間の変化がどのように生じていくかというコミュニケーションモデルを構築する。

PCIをより有効にするためのPCIプログラムを立案・改案 (H24・25年度)

研究(2)-、(2)- の成果をもとに、多相的コミュニケーションを誘発する活動タイプや参加者を導入するPCIプログラムを考案する。

なお、(2)の分析から導かれるPCIプログラムは、(1)のPCI実践へ随時フィードバックする。

4. 研究成果

CCと精神医療現場の人々が相互のやりとりを多相化することを通じて、参加者全員が共に障害や困難に向き合える開かれた関係性を再構築することを試みた。多相的コミュニケーションの実践として以下のPCIプログラムを行った。

(1) 多声化：

[実践1] リエゾンカンファレンス：精神科医・看護師・理学療法士・作業療法士などで「気になった出来事」に関するケーススタディを行い問題を共有・対応策を検討した。これを通じて、それぞれの立場からのみ見えていた問題の本質を相互に共有し、今後の関わり方の指針を見出すことになった。

[実践2] ケアコンソーシアム：複数の近隣施設どうしの精神科医・看護師・言語聴覚士・施設主任等が集い、複数施設に関わる利用者のケーススタディを行った。この結果、一施設の中の問題として扱われてきたものが、利用者を取り巻くすべての環境の問題として取り扱えるようになった。

実践1と2については定期的に会合を開き、現在も継続的に行っている。これらの会を通じて、医療スタッフや福祉施設スタッフが、互いに利用者に対して抱いていた悩みが緩和され、施設間の連携が高まってきている。

(2) 多重化：

[実践3] 着物セラピー：CCを講師として着物の着付け講習会を行った。これは、患者や介護者という役割以外でCCがコミュニケーションに参加する経験となった。

[実践4] 『イイトコサガシ』ワークショップ：CCと一般参加者が交互に様々な会話やスピーチを行い、互いのイイトコロを探す。ワークショップに同等の立場で参加することにより、

会話やコミュニケーションに自信をもち、他者と対等に話せるようになったとの声が多い。
[実践5] 就労模擬面接：就職面談の専門家面接官、CCを就労希望者とした就職模擬面接を行う。就労者という役割を体験した。

これらの実践を通じて、CCを取り巻く精神医療現場の人々が〈治療者-被治療者〉〈介護者-被介護者〉といった限定された関係性を超えて、多様かつ根源的な生を「共に」生きることを可能にするコミュニケーション環境の一端を開いた。さらに、治療者や介護者間のコミュニケーションの機会を開くことにより、看護師や作業療法士がひとりで悩みがちな患者や利用者との関係性をメタ認知的な視点から多元的に捉え直すことを可能にし、施設内に閉じられていた問題を開放するPCIプログラムを展開することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計57件)

1. 高梨克也、岡本雅史、榎本美香、山川百合子、リハビリテーション病院におけるリエゾンカンファレンスの分析と別室視聴環境の効果、均衡生活学、査読有、Vol.10、2014、pp.13-23、URL無
2. 松嶋健、agioのある環境 イタリアの精神医療における生態学的転回について、こころと文化、査読有、Vol.13(1)、2014、pp.27-36、URL無
3. 片桐恭弘、石崎雅人、高梨克也、伝康晴、榎本美香、会話を通じた相互信頼感形成ゲームの可能性、人工知能学会研究会資料、査読無、Vol.SIG-SLUD-B302、2013、pp.29-34、URL無
4. 串田秀也、平本毅、山川百合子、典型的な更新連鎖とそのオールターナティブ精神科外来再診場面の開始部門に関する覚え書き、大阪教育大学紀要、査読有、Vol.157、2013、pp.1178-1182、https://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/27658/1/KJ2_6201_001.pdf
5. 松岡恵子、山川百合子、小谷泉、金吉晴、高次脳機能障害者は自らの障害とリハビリテーションをどのように語るか、認知リハビリテーション、査読有、Vol.18、2013、pp.38-49、URL無
6. 岡本雅史、コミュニケーションの仕掛け 認知と行動の変容を促す多重のストラテジー、人工知能学会誌、査読無、Vol.28(4)、2013、pp.607-614、URL無
7. Makoto Hayashi、Shuya Kushida、Responding with resistance to Wh-questions in Japanese

- talk-in-interaction, Research on Language and Social Interaction, 査読有、Vol.46(3)、2013、pp.231-255、DOI:110.1080/08351813.2013.810407
8. 上野恭子、栗原加代、西川浩昭、舞弓京子、山川百合子、看護師の共感援助行動尺度の信頼性と妥当性の検討、医学と生物学、査読有、Vol.157、2013、pp.1178-1182、URL 無
 9. 小谷泉、谷畑真理子、山川百合子、齊藤秀之、高次脳機能障害者の地域支援における訪問リハビリテーションの重要性 精神科アウトリーチを参考に、訪問リハビリテーション、査読有、Vol.3(2)、2013、pp.561-566、URL 無
 10. 小谷泉、山川百合子、リハビリテーション療法士の専門性-病院・老健・訪問の比較から-、均衡生活学、査読有、Vol.9、2012、pp.13-21、URL 無
 11. 山川百合子、社会的行動障害 高次脳機能障害 Q&A、リハビリナース、査読無、2012 年秋季増刊、Vol.2012、pp.180-189、URL 無
 12. 高梨克也、「コミュニケーション実践のコミュニケーション科学」のための試論-「当事者を交えたデータセッション」という試み-、人工知能学会研究会資料、査読無、Vol.SIG-SLUD-B202、2012、pp.39-46、URL 無
 13. 平本毅、高梨克也、<何か質問はありますか>という問いかけを通じたミーティングの説明場面の構造化、雑誌名：社会言語科学会第 29 回大会発表論文集、査読無、Vol.-、2012、pp.180-183、URL 無
 14. 片桐恭弘、石崎雅人、高梨克也、伝康晴、榎本美香、松坂要佐、保健指導対話を対象とした相互信頼感形成過程の分析、人工知能学会資料、査読無、Vol.SIG-SLUD-B103、2012、pp.89-94、URL 無
 15. 榎本美香、岡本雅史、修復連鎖の終了手続きとしての合意形成フェーズ - コミュニケーション・チャレンジの多人数会話の観察から -、2011 年度日本認知科学会第 28 回大会 発表論文集、査読有、Vol.-、2011、pp.568-575、http://www.jcss.gr.jp/meetings/JCSS2011/proceedings/pdf/JCSS2011_P2-39.pdf
 16. 榎本美香、伝康晴、話し手の視線の向け先は次話者になるか、社会言語科学、査読有、Vol.14(1)、2011、pp.91-109、DOI:1344-3909
 17. 岡本雅史、榎本美香、修復の権限はいかにして移譲されるか？ - 多人数会話における第三者修復の事例を通じて -、日本語用論学会第 13 回大会発表論文集、査読無、Vol.6、2011、pp.25-31、http://www.impliciture.net/pdf/okaen_o_PSJ2011.pdf
 18. 山川百合子、河合伸念、幻覚妄想かるたを使ったピアサポーター養成に向けた取り組み、均衡生活学、査読有、Vol.8、2011、pp.1-6
 19. 串田秀也、追加的解決方法を求める訴え - 精神科外来診察におけるデリケートな問題提示の一事例 -、大阪教育大学紀要 第 部門、査読無、Vol.60(1)、2011、pp.1-21
 20. 高梨克也、実社会で自然に生起する継続的なミーティング活動のフィールド調査の狙いと工夫、人工知能学会資料、査読無、Vol.SIG-SLUD-B101、2011、pp.55-62、URL 無
 21. 加納圭、水町衣里、元木環、高梨克也、科学者の“対話力”トレーニングプログラムの開発 - 伝える、聴く、分かち合う、ができる科学者へ -、日本科学教育学会年会論文集、査読無、Vol.35、2011、pp.157-158、URL 無
 22. 高梨克也、平本毅、ミーティングの周辺の参加者が何かに気づくとき、電子情報通信学会技術報告、査読無、Vol.HCS2011-41、2011、pp.77-82、URL 無
 23. 平本毅、高梨克也、ミーティング場面における「新たな切り口」の導入：周辺の参加者による貢献に着目して、社会言語科学会第 28 回大会発表論文集、査読無、Vol.-、2011、pp.218-221、URL 無
 24. Yasuhiro Katagiri、Katsuya Takanashi、Masato Ishizaki、Mika Enomoto、Yasuharu Den and Yosuke Matsusaka、Concern Alignment in Consensus Building Conversations、SemDial 2011: Proceedings of the 15th Workshop on the Semantics and Pragmatics of Dialogue、査読有、Vol.-、2011、pp.208-209、http://projects.ict.usc.edu/nld/semDial2011/proceedings/semDial2011_katagiri.pdf
 25. Katsuya Takanashi and Takeshi Hiramoto、Designing a Future Space in Real Spaces: Transforming the Heterogeneous Representations of a "Not Yet Existing" Object、Proceedings of International Workshop on Multimodality in Multispace Interaction (MiMI)(Hosted by the Third JSAI International Symposia on AI (JSAI-isAI 2011)、査読有、Vol.-、2011、pp.25-36、URL 無
 26. 高梨克也、複数の焦点のある相互行為場面における活動の割り込みの分析、社会

言語科学、査読有、Vol.14(1)、2011、
pp.48-60、URL 無

〔学会発表〕(計 54 件)

1. 岡本雅史、「本題に入る前に」～共有基盤構築の観点から見たオープニングの設計、電子情報通信学会ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会(VNV)第8回年次大会(招待講演)、2014年3月30日、国立情報学研究所(東京都)
2. 高梨克也、マルチモーダルインタラクション分析の基礎と現代的課題、電子情報通信学会音声研究会2014年1月研究会(招待講演)、2014年1月24日、名城大学天白キャンパス(愛知県)
3. 横田結花、笹島京美、柳町公美、山川百合子、リハビリテーション専門病院における心理療法の活用と効果(1) 高次脳機能障害を抱える患者への箱庭療法、日本心理臨床学会 第32回秋季大会、2013年8月26日、パシフィコ横浜(神奈川県)
4. 岡本雅史、高梨克也、榎本美香、小谷泉、松嶋健、山川百合子、多相的コミュニケーション介入～精神医療コミュニティの再構成を促す実践理論に向けて～、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)研究会2013年8月研究会、2013年8月23日、立命館大学朱雀キャンパス(京都府)
5. 榎本美香、融和的コミュニティを形成するモノ・自己・他者・場 4項インタラクションの分析、HCS&VNV 合同研究会、2013年8月23日、立命館大学朱雀キャンパス(京都府)
6. Shuya Kushida、Yuriko Yamakawa、Resisting how to make a decision: On some patients' responses to treatment recommendations in outpatient psychiatric consultations in Japan、4th International Conference on Conversation Analysis & Clinical Encounters、2013年7月5日、University of York, United Kingdom
7. 定村美紀子・定村由美子・山川百合子、発達障害児支援における教育と医療の連携のあり方 教師と協働で行った事例検討会からの学び、第4回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会、2013年6月11日、仙台国際センター(宮城県)
8. Shuya Kushida、Epistemic Stance As Resource for Treatment Negotiation: On Some Patients' Responses to a Treatment Recommendation in Outpatient Psychiatric Consultations in Japan、111th Annual Meeting of the American Anthropological Association、2012年11月18日、San Francisco Hilton, USA
9. 串田秀也、処置の勧めへの「理由つき」同意：精神科外来再診場面における処置決定の応用会話分析、第85回日本社会学会大会、2012年11月3日、札幌学院大学(北海道)
10. 松嶋健、精神医療の医療化と脱医療化 バザーリア法から30年余を経たイタリアの現状から、第16回精神医学史学会、2012年10月28日、京都大学(京都府)
11. 松岡恵子、山川百合子、小谷泉、金吉晴、高次脳機能障害者は自らの障害とリハビリテーションをどのように語るか、認知リハビリテーション研究会、2012年10月6日、慶應義塾大学病院(東京都)
12. 定村美紀子、奥野純子、山川百合子、柳久子、訪問看護における日記継続が疾病管理に及ぼす効果、第3回日本プライマリ・ケア連合会、2012年9月1日、福岡国際会議場(福岡)
13. Katsuya Takanashi、When does a pointing have to retract?: The semiotic nature of "stroke" of pointing gestures、The International Society for Gesture Studies Conference 2012、2012年7月24日、Lund University, Sweden
14. 松嶋健、「心の病い」から「心のエコロジー」へ イタリアの精神保健実践からみる「テリトリー化された心」の様相、日本文化人類学会第46回研究大会、2012年6月23日、広島大学(広島県)
15. 片桐恭弘、石崎雅人、高梨克也、伝康晴、榎本美香、松坂要佐、保健指導対話を対象とした相互信頼感形成過程の分析、第64回人工知能学会言語・音声理解と対話処理研究会、2012年3月26日、東京大学本郷キャンパス(東京都)
16. 平本毅、高梨克也、<何か質問はありますか>という問いかけを通じたミーティングの説明場面の構造化、社会言語科学会第29回研究大会、2012年3月10日、桜美林大学 町田キャンパス(東京都)
17. 高梨克也、「インタラクションの観察」の現状と課題 - インタラクションだけを観察できるか -、第2回人工知能学会子どものコモンセンス知識研究会(招待講演)、2012年2月11日、お茶の水女子大学(東京都)
18. 岡本雅史、榎本美香、共同行為としての会話における「潜在」と「不在」、日本語用論学会第14回大会、2011年12月4日、京都外国語大学(京都府)
19. 松嶋健、アクターからパフォーマーへ イタリアの地域精神保健と演劇人類学の出会いから、日本文化人類学会第45回研

- 究大会、2011年11月12日、法政大学 市ヶ谷キャンパス(東京都)
20. 高梨克也、多人数インタラクシオン分析の背景と理論的枠組み、京都大学学術情報メディアセンターセミナー「多人数インタラクシオンの分析と応用」、2011年9月27日、京都大学(京都府)
 21. 榎本美香、岡本雅史、修復連鎖の終了手続きとしての合意形成フェーズ - コミュニケーション・チャレンジの多人数会話の観察から、日本認知科学会第28回大会、2011年9月24日、東京大学(東京都)
 22. Shuya Kushida, "Intelligibility and sensitivity of a treatment recommendation: examples from psychiatric consultations in Japan,"、3rd International Conference on Conversation Analysis and Clinical Encounters、2011年7月13日、York University, UK
 23. 山川百合子、小池希、栗原加代、高次脳機能障害の就労に関する心理的要因、第37回日本保健医療社会学会大会、2011年5月22日、大阪大学(大阪府)

〔図書〕(計2件)

1. 榎本美香、相川清明、飯田仁、コロナ社、マルチモーダルインタラクシオン、2013、239(1-8、132-223)
2. 山川百合子、栗原加代 (編著)、医学出版社、看護ポケットマニュアル 精神科、2012、124

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/pciprjct/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

榎本 美香 (ENOMOTO, Mika)
東京工科大学・メディア学部・講師
研究者番号： 10454141

(2)研究分担者

岡本 雅史 (OKAMOTO, Masashi)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号： 30424310

山川 百合子 (YAMAKAWA, Yuriko)
茨城県立医療大学・保健医療学部・准教授
研究者番号： 40381420

松嶋 健 (MATSUSHIMA, Takeshi)
成安造形大学・芸術学部・研究員
研究者番号： 40580882

串田 秀也 (KUSHIDA, Shuya)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号： 70214947

(3)連携研究者

高梨 克也 (TAKANASHI, Katsuya)
京都大学・学術情報メディアセンター・研究員
研究者番号： 30423049